

4月号 病害虫防除

4月になると病害虫の防除が本格的に始まりますが、病気も害虫も、防除適期を逃すとその後の対応が難しくなります。本年は暖冬で生育が早まる可能性がありますので、果樹の生育状況や病害虫の発生状況をこまめに観察して、適期防除に努めましょう。

また、今月は特に各種病害の重点防除時期です。発芽時期や開花期前後の防除を徹底しましょう。

<露地カンキツ>

○そうか病対策

新葉の展葉初期（最も伸びた新梢が1 cm 程度の時期）が、本病の防除適期であり、デランフロアブル 1,000 倍、ストロビードライフロアブル等を散布します。デランフロアブルはかぶれに注意してください。ストロビードライフロアブルは、単剤散布の場合は 2,000 倍で、ハダニ対策としてマシン油乳剤 200 倍を混用する場合は 3,000 倍で散布します。

○かいよう病対策

発芽前から5月頃までがかいよう病の最も重要な防除時期です。昨年は秋期に台風の襲来があり、本病の発生が多い圃場があることから、本年は平年よりかいよう病の菌密度が高いと予想されます。罹病性品種の中晩柑類や前年にかいよう病が発生した温州ミカン園、高糖系温州ミカン、温州ミカンの幼木園・高接園では、3月にボルドー剤を散布されていると思います。このような園では、4月中下旬までにクレフノン 200 倍を加用した銅水和剤(コサイド 3000 の場合 2,000 倍、フジドーL フロアブルの場合 1,000 倍)やアビオンE 1,000 倍を加用した IC ボルドー66D 60 倍を必ず散布してください。

また、今後の多発生を防ぐために罹病葉や罹病枝は除去します。



写真1 かいよう病の罹病葉

<ハウスミカン>

○ハダニ対策

収穫2か月前を目安にダニコングフロアブル 2,000 倍やバロックフロアブル 2,000 倍などを散布しましょう。散布ムラがないよう、丁寧に散布してください。

○アザミウマ類対策

4月下旬頃から、ハウスのサイドの開放に伴ってアザミウマ類の侵入が始まります。侵入を防ぐため、ハウスサイドにアルミ蒸着シートや光反射シート織込ネットを設置しましょう。

また、アザミウマの種類によって防除薬剤が異なりますので（表1参照）、トラップ調査などにより種の確認を行います。種の確認方法がわからない場合は普及センター、JA、試験場などに問い合わせてください。

表1 ハウスミカンのアザミウマ類防除薬剤

アザミウマの種類	薬剤名	IRAC※ コード	希釈倍率	収穫前日数
ミカンキイロアザミウマ 及びネギアザミウマ	ファインセーブフロアブル	—	2,000倍	7日前まで
	ディアナWDG	5	10,000倍	前日まで
	スピノエースフロアブル	5	4,000倍	7日前まで
ミカンキイロアザミウマ	ウララ50DF	29	5,000倍	7日前まで
	ダズバンDF	1B	3,000倍	14日前まで
	コテツフロアブル	13	2,000倍	前日まで
ネギアザミウマ	ハチハチフロアブル	21A	2,000倍	前日まで

※殺虫剤抵抗性対策委員会(IRAC)が定めた作用機構に基づく分類コード

（「—」はコード未設定のもの）

<ナシ>

○黒星病対策

開花前後は黒星病の最も重要な防除時期です。時期を逃さず、計画的に薬剤を散布します（表2参照）。スピードスプレーヤーは必ず全列走行を実施し、葉の表裏両方に薬液が十分に付着するよう（薬液量は300L/10a）に散布してください。スピードスプレーヤー散布の場合、園の外周部等の薬液がかかりにくい場所では、手散布を行います。黒星病の発生が多い園（特に露地）では、薬剤散布間隔が10日以上空かないように注意します。

また、剪定枝や落葉など伝染源が園内にあると発生を助長しますので、早急に処分を行います。落葉処理をした圃場でも、樹の周囲や園の隅に落葉が残っていることがありますので、このような部分も必ず確認して処理を行ってください。特に、昨年黒星病の発生が多かった園は必ず取り組みましょう。

表 2 ナシ黒星病防除薬剤

時期	薬剤名	系統名 (FRACコード※)	希釈倍率	収穫前日数	備考
開花直前	スコア顆粒水和剤 アンビルフロアブル	DM I (3)	4,000倍 1,000倍	14日前まで 7日前まで	多発生園ではベルクートフロアブルを加用
	スクレアフロアブル	Q o I (11)	3,000倍	14日前まで	スクレアフロアブルは花粉の発芽に影響するので開花中は散布しない
	アクサーフロアブル	DM I (3) + S D H I (7)	2,000倍	14日前まで	
交配3日後	ベルクートフロアブル	ビスグアニジン(M7)	1,500倍	14日前まで	発生が問題となる園では、DMI剤を加用
	フルーツセイバー	S D H I (7)	2,000倍	前日まで	
落弁直後	スコア顆粒水和剤 アンビルフロアブル	DM I (3)	4,000倍 1,000倍	14日前まで 7日前まで	多発生園ではベルクートフロアブルまたはユニックス顆粒水和剤47を加用
	アクサーフロアブル	DM I (3) + S D H I (7)	2,000倍	14日前まで	

※殺菌剤耐性菌対策委員会(FRAC)が定めた作用機構に基づく分類コード

○疫病対策

4月下旬から6月にかけて、降雨が続くと多発する病気で、新梢や果そう部が黒色に変色し、枯死します。本病の病原菌は土壌中に生息しており、水を介して伝搬します。そのため、風雨による土壌のはね上がりなどで棚上まで菌が運ばれ、新梢葉の特に柔らかい組織に感染します。過去に本病が発生した園の土壌中には病原菌が多いと考えられますので、該当する園では強風雨の後には必ずアリエッティ水和剤 800 倍等を散布します。

また、降雨時や降雨直後に除草作業を行うと、雨滴とともに土壌中の菌を跳ね上げてしまうので、晴れた日に行います。

<ブドウ>

○黒とう病対策

萌芽直前（3月下旬頃）から新梢伸長期（5月上旬頃）の防除が非常に重要です。萌芽直前にはデランフロアブル 1,000 倍やキノンドーフロアブル 600 倍などを散布されていると思いますので、今月も展葉 5～6 枚目ごろ、8～9 枚目ごろにキノンドーフロアブル等を散布します。

また、薬剤散布後の積算降雨量が 150mm に達した時点で、早急に再散布を実施してください。キノンドーフロアブルなどの薬剤は4月下旬から感染が始まる枝膨病に対しても非常に有効です。

<キウイフルーツ>

○かいよう病対策

発生の有無にかかわらず、すべての園で必ず防除を実施し、発生を予防しましょう。発芽前までは IC ボルドー66D 等を散布されていると思いますが、発芽後にはコサイド 3000 2,000 倍（クレフノン 200 倍加用）等を散布します。

また、かいよう病の被害枝は早急に切除してください。本病に対する抵抗性は品種ごとに差があり、被害切除部位についても対応が異なります。そのため、被害切除部位の判断が難しい場合、また葉や新梢、花蕾にかいよう病に酷似した症状が見られ、判断に迷う場合には指導機関等に相談してください。

ちなみに、かいよう病に対する抵抗性がやや強い「ヘイワード」では、樹液漏出が見られる場合には、樹液漏出箇所から褐変が見られなくなる位置まで遡って枝を切除します。葉の褐変症状や新梢の枯死が見られる場合には前々年枝基部まで切除を行います。切り口にはトップジンMペーストを塗布し、切除した枝は土中に埋めるなど適切に処分して下さい。切除に使用した器具はエタノール 70%、次亜塩素酸ナトリウム 0.02%等での消毒を徹底します。



写真 2 暗褐色の樹液の漏出痕

<ウメ>

○黒星病対策

展葉初期および展葉期は黒星病の重要な防除時期です。展葉初期にはトップジンM水和剤 1,000 倍を散布し、展葉期にはインダーフロアブル 5,000 倍やストロビードライフロアブル 2,000 倍、オーソサイド水和剤 80 800 倍などを散布します。